

海外生活レポート③

病を得て、今はボランティア



【アメリカ】



▲カリフォルニアで25年間生活している川崎市出身の高津はるみさん

レポーター 高津 はるみ さん
1985年よりカリフォルニア在住

▼カリフォルニアの海岸



▲「シティ オブ ホープ」(ガン専門病院)

現在、私はカリフォルニア州トーランスで夫と息子2人(中学生と高校生)の計4人で暮らしています。息子達の教育の傍ら、2006年に介護システム「ホープ・インターナショナル・ホスピス」でボランティアを始めました。

週1回、患者の家を訪れ、末期患者やその家族と接し、食事や買い物などの手助けをしています。「何をしましょうか」「気分はいかがですか」といった何気ない会話から始めて、話を聞いてあげることが多いです。患者さん達も覚悟が決まっているとか、どこの家庭も穏やかで「お話しできて楽しかった」と喜んでいただき、私も嬉しくなります。

私がボランティアを始めるきっかけになったのは、1996年(13年前)に「ホープ・インターナショナル・ホスピス」の最高責任者のN医師に乳ガンを治療してもらったことからです。

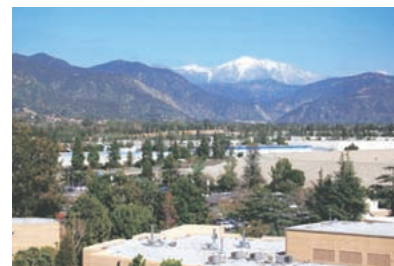
その時、ガンはかなり進行しており、様々な検査の結果もよくなかったのですが、担当のN医師は本当に親身になってくださり、「まだこういうのがありますよ」と臨床試験中の治療方法について時間をかけて熱心に説明してくれました。そして、「はるみさんには一番合っているだろう」ということで、ガン専門の病院「シティ オブ ホープ」で臨床試験中の治療を受けることになったのです。

当時、子どもたちも小さく、「病気を治したい。前向きに生きなければならない。」という気持ちでいっぱい。夫はガンの専門書を読み、私の看病と自分の仕事・家事・育児と全てよくやってくれました。日本から家族や従姉妹も駆けつけ、友人・親戚の支援もあり、私は治療に専念できて幸いでした。

また、「シティ オブ ホープ」には患者の数より遙かに多くのスタッフ(ドクター・ナース・セラピ

スト・そしてボランティア)がおり、とても心強かったです。病院敷地内のコテージで数週間、自炊をしながら、強い化学治療を受けましたが、点滴をしたままゴルフカートで治療室に移動する時の送り迎えなどはボランティアの方にお世話になりました。

このようにして、N医師や多くの方に支えられ、10年以上たっても再発することなく今に至っています。



▲「シティ オブ ホープ」

元気になり、お世話になった方達に恩返しをしたいと思っておりましたところ、担当してくださったN医師が開設したホスピスでナースとボランティアを探していると聞き、即答でボランティアを引き受けました。少しでもお手伝いできればと思いつつ今日に至っております。

介護のお手伝いをしているうちに医療の専門知識を身につけたくなり、以前通っていたカレッジで看護科を専攻し、昨年末にアシスタントナースのライセンスを取得しました。その後、ホームヘルスエイドにも合格しましたが、より高度のライセンスを取得したいので医療の勉強を続けています。あまり得意ではない化学や生物の分野を英語で受講するのはかなり努力を要することですが、家族のためにも、手助けを必要としている人達のためにも、そしてなにより親身になって乳ガンを治療して下さったN先生のお力になれたらと願い頑張っています。

(文書編集:編集ボランティア 福地直子)

「シティ オブ ホープ」

ガン専門病院。ロスアンゼルス市の北東部にあり、美しい景色に囲まれ、緑多い広大な敷地の中に、治療に必要なあらゆる施設が整っている。末期患者のためには家族と共に治療しながら生活できるコテージが設置されている。そこにはシステムキッチンや障害者にも使い勝手のよいバスルームがあり、居間にはゆったりくつろげる家具が備え付けられ、静かでプライベートな時間が保たれている。